郵送法調査における中間的選択肢の研究

～郵送実験調査による分析～

世論調査部　小野寺典子

従来，世論調査は個人面接法で行われていたが，最近では，郵送調査法が増えてきた。NHK放送文化研究所では，2008年と2010年に郵送実験調査を行い，実際の調査でも使用するようになってきている。

本研究では，2010年の郵送実験調査に基づき，中間的選択肢の回答率や他の選択肢の回答率の差から得られる質問の特徴を整理しなおすとともに，郵送調査の中間的選択肢を回答する人の特徴を分析する。

中間的選択肢は，その時々の状況によって回答が異なるような質問，ふだん考えないような内容の質問などで回答が多く，日常的な実態についての質問などで，回答が少なくなることを確認した。中間的選択肢を提示しない場合，大小のバランスは変わらないことが多いが，選択肢の内容などによって，提示した場合と比べて，好ましそうにみえる選択肢など，一方に回答が集中する場合があった。

また，性・年層などの属性で中間的選択肢を選びやすい人がいるのではなく，その質問に関連した状況にある場合や，態度や意見を持っているかどうかで中間的選択肢が選ばれていることがわかった。今回の調査では，対象とした質問にテレビに関連のある質問が多いこと，調査相手が単身者の場合には明らかに回答が決まってくるような質問が含まれていたことなどが影響していた。

1　はじめに

従来，世論調査は個人面接法で行われていたが，最近では郵送調査法が増えてきた[1)]。NHK放送文化研究所では，2008年と2010年に郵送実験調査を行い，運用の検討を図り，実際の調査でも使用するようになってきている。郵送調査法は個人面接調査法のように調査員が回答を記入する方式ではなく，調査相手本人が記入する自記式調査である。自記式調査では，調査相手が質問文を読むだけで理解し，並べられた選択肢の中から適切なものを選ぶ。すなわち，郵送調査法の場合には，質問文や選択肢のワーディングや構成が，個人面接法以上に回答に大きく影響する。

2010年3月に実施した個人面接法の「日本人とテレビ・2010」に合わせた郵送実験調査では，質問文における「どちらともいえない」という中間的選択肢の検討が可能なように設計した。この中間的選択肢の提示の有無による回答分布の違いについては，『放送研究と調査』2010年12月号でも報告した（村田・小野寺，2010）。そこでは，個人面接法と郵送法とで中間的選択肢の回答率の比較を行い，中間的選択肢の回答率が高い質問，低い質問の特徴を検討し，中間的選択肢の有無による他の選択肢の回答率の差をみた。

本研究では，中間的選択肢の回答率や他の選択肢の回答率の差から得られる質問の特徴を整理しなおすとともに，郵送調査の中間的選択肢を回答する人の特徴を分析する。

2 郵送調査における中間的選択肢の問題点と過去の研究

質問に対して調査相手にとって回答にふさわしい選択肢が無いとき，調査相手は無理やりいずれかの選択肢を選ぶか，回答をしないでそのままどれも選ばないでおくことになる。このようなことを避けるために，選択肢の中に中間的選択肢の「どちらともいえない」「どれでもない」や「いちがいにはいえない」などの中間的選択肢を用意しておくことがある。しかし，郵送調査の場合には，調査員がいない自記式であるため，提示した場合には中間的選択肢に回答が集中しやすいのではないか，提示しない場合には無理やりどちらかの意見を選ばせていることになっているのではないかなどの懸念がある。また，中間回答の多すぎる調査結果は，分析が困難である。

さらに，同じ「どちらともいえない」を選んでいても，回答者によって意味合いが違う可能性がある。山田（2010）は，中間点である「どちらともいえない」という回答の意味は，①「考えたことがない」や「考えてもわからない」である場合，②肯定でも否定でもないという状態，③「どちらでもある」といった両義的な意識の表明である場合があり得るとしている。

いくつかの中間的選択肢についての研究が，これまでにもされてきている。林（1996）は，統計数理研究所で1987～1988年に実施された『国民性調査』の国際比較から，日本人は他の国よりも「いちがいにはいえない」といった中間的選択肢への回答が高い傾向を示している。

また，前田（2005）は，『国民性調査』の質問を使用して，郵送調査における中間的選択肢の提示と非提示それぞれの場合と面接調査の調査結果を比較した。この面接調査では，調査員の聞き取りの結果を各選択肢に振り分ける方式をとった。**表1**のように，郵送調査で中間的選択肢（この場合は「いちがいにはいえない」）を提示すると，この中間的選択肢は面接とは比較にならないほど多く選ばれ，提示しない場合，「その他」という選択肢を置いたが，その自由記述内容から中間的選択肢に該当すると判断される回答の出現率は非常に小さい。前田はそのほかに3つの質問実験を行っているが，その観察から，「これらの結果は自記式と非自記式（調査員による聞き取り方式）の調査では，質問文と選択肢の相対としての調査項目が対象者に与える“刺激”としての意味合いに大きな違いが生じ得ることの明白な例となっている。また，その違いは選択肢の呈示状態の操作などでは容易に解消しないことを示している」と述べている。なお，前田の事例では，

表1　提示の有無による中間回答の特徴

Q　心の豊かさはへらないか

	面接	郵送	
		中間選択肢 提示	中間選択肢 非提示
反対（へる）	32.6%	26.9%	48.0%
いちがいにはいえない	20.9	45.5	2.2
賛成（へらない）	43.6	26.9	43.8
その他	1.1	0.3	5.1
無回答	1.8	0.5	0.9

＊1都3県での比較
前田忠彦「郵送調査法の特徴に関する一研究」『統計数理』（2005）第53巻第1号57-81

中間的選択肢以外の賛成の意味を持つ選択肢と反対の意味を持つ選択肢が，面接，郵送の提示・非提示で回答率の大小のバランスが異なっているものがある。

NHKでは，1980年に個人面接法による質問文検討のための個人面接法の実験調査を行っている（吉田，1980）。5段階尺度の質問で「どちらともいえない」を真中に入れた場合と，選択肢の末尾に入れた場合，3段階尺度の質問で真中に入れた場合を比較した。5段階で真中と末尾との比較では，有意差が認められない質問もあったが，真中に入れた場合のほうが「どちらともいえない」が多くなる傾向が強い。また，3段階で真中に入れた場合は，5段階よりも多い傾向がみられた。

このように，日本では他の国よりも中間的選択肢への回答が多いこと，また，中間的選択肢は，自記式調査で多くなる傾向があり，中間的選択肢を置く場所や，全体の選択肢の数の影響を受ける。さらに，他の選択肢の回答に対して影響があることなどが示されてきた。

本調査（個人面接法）の『日本人とテレビ』における「どちらともいえない」という中間的選択肢のある質問は，提示方法の違い（調査相手に提示する回答項目リストの使用法）で4つのタイプに分かれる 。

a　回答項目リストをまったく使用しない
　：第5問A～H，第7問，第16問，第26問A·B

b　回答項目リストには質問のみ提示，選択肢の提示なし
　：第9問A～H，第22問A～C，第23問A～C，第25問A～C

c　回答項目リストに選択肢を提示，ただし，中間的選択肢の提示はなし
　なお，他は2選択肢であるのに対し，このタイプのみ頻度を表す3選択肢
　：第6問A～D

d　回答項目リストに中間的選択肢を含めて選択肢を提示
　：第11問A～E

3　実験調査の概要

今回の検討に使用した個人面接法の「日本人とテレビ・2010」の本調査と郵送法の実験調査の概要は，**表2**のとおりである。

中間的選択肢の提示の有無による回答分布の相違をみるために，郵送調査については，スプリット・バロット法で調査相手を2つに分け，郵送Aは中間的選択肢を「提示」，郵送Bは「非提示」とした。

表2　調査の概要

	面接	郵送A	郵送B
		中間的選択肢提示	中間的選択肢非提示
調査期間	2010年3月6日(土)～7日（日）	2010年3月3日（水）～4月16日（金）	
調査方式	個人面接法	郵送法	
調査対象	全国16歳以上の国民		
抽出台帳	住民基本台帳		
抽出方法	層化無作為2段抽出法		
調査相手数	1,800人 (12人×150地点)	900人 (6人×150地点)＊	900人 (6人×150地点)＊
調査有効数 (有効率)	1,046人 (58.1%)	609人 (67.7%)	606人 (67.3%)

＊スプリット・バロット法で，以下のように，1地点内を6人ずつに分けて使用した。
郵送A：偶数地点は偶数番号，奇数地点は奇数番号で実施
郵送B：偶数地点は奇数番号，偶数地点は偶数番号で実施

すなわち，タイプaとbは，個人面接法では回答項目リストに選択肢の提示が無いため，調査相手は選択肢をまったく見ないで回答し，調査員が，その回答を中間的選択肢や無回答を含んだ選択肢の中から，該当するものに振り分ける形式の質問である。

タイプcとdは，回答項目リストに選択肢を提示するので，調査相手は選択肢のリストを見ながら回答する。ただし，タイプcは中間的選択肢を提示しない，タイプdは中間的選択肢を提示するという違いがある。したがって，タイプdの場合のみ，調査相手は個人面接法の場合も中間的選択肢を提示された郵送調査と同じ回答リストを見ることになる。なお，タイプdの質問については，郵送Bでも中間的選択肢を提示した[2)]。

また，タイプcのみ「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」という3段階の頻度の選択肢からひとつを選ぶ形式となっている。

このような面接法の調査で異なる提示の仕方をしているのには，それぞれ理由があると思われる。回答選択肢を提示しないタイプaは耳で聞いただけで回答できる質問，タイプbは，リストの質問に示された甲乙で答えるか，「そう思う」「そう思わない」で答えるため，あえて選択肢を提示する必要がない質問である。逆に，タイプcやタイプdは選択肢の中から回答を選ぶ質問である。特にタイプdで中間的選択肢「どちらともいえない」を提示されているのは，当初，この質問が作成されたとき，選択肢から回答を選ぶのが困難な質問と考えられたためであろう。

なお，タイプa～dの質問と面接・郵送A・郵送Bの単純集計結果を文末に掲載した。

4 中間的選択肢への回答の特徴

村田・小野寺（2010）では，中間的選択肢の回答率が高い質問と低い質問の特徴をみた。ここでは，あらためてこの特徴の整理を行う。

(1) 面接と郵送の比較

中間的選択肢への回答は，面接と郵送でどのように異なるのだろうか。面接と郵送Aの回答率を比較すると，**図1**のようになる。面接では，回答率はほとんどが20％未満であるが，郵送では20％以上が半数以上ある。

面接を横軸，郵送Aを縦軸にとって散布図にすると**図2**のとおりで，面接で高いものは，郵送Aでも高いという相関関係がある。

また，面接の回答項目リストにおける提示のタイプa～dによって異なる傾向がみられる。タイプa～cまでは，郵送Aが面接調査よりも明らかに高いが，タイプdに関しては必ずしもそうではなく，他より相関が高くみえる。これは，面接の調査相手は，タイプa～cについては，提示が無いので中間的選択肢があるのを知ら

図1　面接と郵送Aの中間選択肢への回答率（件数）

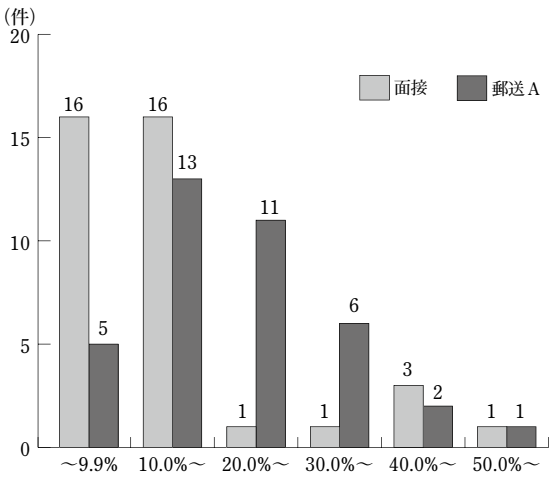
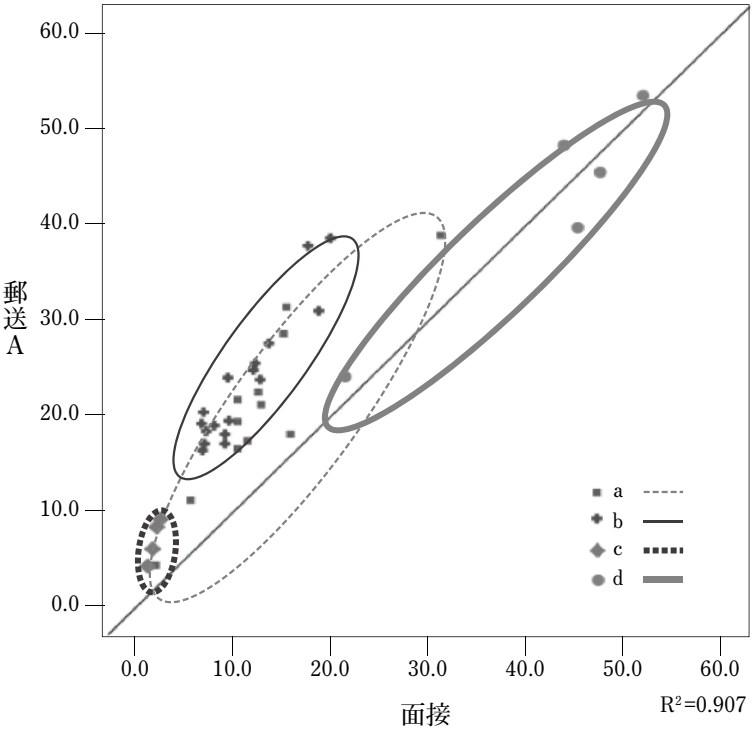


図２　中間的選択肢への回答率（面接と郵送Ａの比較）



ないのに対して，タイプdについては郵送調査と同じように，中間的選択肢の入っているリストを見ながら回答するためと思われる。

また，特にタイプcで中間的選択肢への回答率が低い。これは，他のタイプが2選択肢であるのに対して，タイプcのみ3段階の頻度の選択肢から選ぶ形式であるためと考えられる。なぜ，この3段階の場合に低くなるかについては，後述する。

なお，郵送調査法は，個人面接法より無回答が少ないという特徴がある。今回，対象とした質問項目では，面接の最大が5.9％に対し，郵送Ａが2.8％と低い。ただし，仮に無回答が，「どちらともいえない」と同じ意味であるとして，中間的選択肢の回答率に無回答率を加えて比較しても，中間的選択肢のみでの比較と傾向は変わらない。

（2）中間的選択肢への回答が多い質問

中間的選択肢への回答が多い質問の例は，**表3**のとおりである。その時々の状況によって異なるようなどちらの回答もあり得るような質問と，ふだん考えたことが無いような内容の質問で，中間的選択肢への回答が多い。

その時々の状況によって異なる質問としては，第5問G「テレビの見方：ひとりだけで見たいか」が例としてあげられる。この質問では，ある番組はひとりで見たいしある番組は他の人といっしょに見たい，というように番組や状況で異なるため，

表３　中間的選択肢の回答が多い質問の例

◆その時々の状況によって回答が異なるような質問

―テレビの見方　G：ひとりだけで見たいか―

第５問 G．あなたは，テレビをひとりだけで見たいほうですか，それとも，他の人といっしょに見たいほうですか。

	面接	郵送 A
1. ひとりだけで見たい	36.3 %	37.4%
2. 他の人といっしょに見たい	30.1	22.7
3. どちらともいえない	31.2	38.9
4. わからない，無回答	2.4	1.0

◆ふだん考えないような内容の質問

―テレビの影響イメージ　A：深く考える力―

第 11 問A．テレビは人々がものごとを深く考える力を・・・

	面接	郵送 A
1. 強くした	34.2 %	29.9%
2. 弱くした	14.1	22.8
3. どちらともいえない	47.5	45.5
4. わからない，無回答	4.2	1.8

「どちらともいえない」という回答が多くなったと考えられる。面接でも「どちらともいえない」は提示していないのにもかかわらず非常に高い。

次に，ふだん考えたことが無いような内容の質問については，第11問Ａ「テレビの影響イメージ：深く考える力」を例としてあげることができる。前項でも述べたように，この質問を含めたタイプdの第11問Ａ～Ｅの一連のテレビの影響イメージについての質問は，面接でも中間的選択肢を提示している質問であるため，中間的選択肢への回答率は，面接も郵送と同じくらい高い。回答率の最小は，面接は21.4％，郵送Ａは24.1％，最大は，面接は51.9％，郵送Ａは53.5％である。なお，第11問Ａ～Ｅについては，郵送Ｂでも「どちらともいえない」を提示したが，同様に大きい。

(3) 中間的選択肢への回答が少ない質問

中間的選択肢への回答が少ない質問の例をみると，**表4**のとおりで，3段階の頻度を回答する質問と日常的な実態を回答する質問であった。

3段階の頻度を回答する質問は，タイプcの質問で，第6問Ａ～Ｄがそれにあたる。第6問Ａ「現代的なテレビの見方：環境性」では，真中の選択肢「ときどきある」にも，中間的な意味があると考えられる。そのため，「ときどきある」を答える人が多く，中間的選択肢の「どちらともいえない」への回答が少なくなったのだと思われる。他のＢ～Ｄについても同様である。

また，日常的な実態を回答する場合にも，中間的回答が少なくなる。たとえば，第5問Ｂ「テレビの見方：時刻決まっているか」のように，日常的な実態をそのまま回答するため答えやすく，中間的選択肢への回答が少なくなると考えられる。ただし，日常的な実態を答える場合が，必ずしも中間的選択肢への回答が少ないとは限らない。日常的な実態であっても，どちらの回答もあり得る質問では，中間的選択肢への回答が多くなる。たとえば，第5問Ａの「ひとりで見ることが多いか，他の人と見ることが多いか」という質問では，「どちらともいえない」という回答が，面接で11.4％，郵送Ａで17.4％とそれほど少なくない。この場合は，「ひとりで見ること」「他の人と見ること」の両方の実態が選べない状況があるためと考えられる。このように，2つの選択肢に選びにくさのある場合には，たとえ，日常的な実態であってもその選びにくさを反映して，中間的選択肢への回答が多くなると考えられる。

表４　中間的選択肢の回答が少ない質問の例

◆選択肢が３段階の頻度の質問
―現代的なテレビの見方　Ａ：環境性―
第６問Ａ．家に帰ると，とりあえずテレビをつける

	面接	郵送Ａ
１．よくある	40.8 ％	39.4％
２．ときどきある	22.8	26.9
３．ほとんどない	33.1	26.3
４．どちらともいえない	1.7	6.1
５．わからない，無回答	1.5	1.3

◆日常的な実態についての質問
―テレビの見方　Ｂ：時刻決まっているか―
第５問Ｂ．あなたがテレビを見る時刻はだいたい決まっていますか，それとも，あまり決まっていませんか。

	面接	郵送Ａ
１．だいたい決まっている	75.0 ％	80.8％
２．あまり決まっていない	21.4	13.8
３．どちらともいえない	2.0	4.4
４．わからない，無回答	1.5	1.0

5 中間的選択肢の有無による他の選択肢の回答分布

中間的選択肢を提示した郵送Ａと提示しない郵送Ｂとでは，質問全体の回答分布はどのように異なるのであろうか。村田・小野寺（2010）によれば，中間的選択肢を提示する（しない）と，それ以外の選択肢の回答率が低く（高く）なるが，ほとんど両極のバランス（大小）は変わらない[3)]。また，回答差の大きいものと小さいものとに分けられる。

これらの質問項目についてさらに詳細にみると，中間的選択肢を提示しない場合，中間的選択肢を提示した場合に比べて，ひとつの選択肢に偏って回答が集中する場合と，複数の選択肢に回答が分散する場合とがみられる。ここでは，このような提示・非提示による回答差の違いの形態に注目して整理を行う。

(1) 中間的選択肢以外の選択肢への回答率の差

まず，中間的選択肢の提示のある郵送Ａと，提示の無い郵送Ｂとで，中間的選択肢以外の選択肢への回答率の差をみると，**表５**のとおりである。これは，郵送Ｂでも中間的選択肢を提示したタイプｄを除いた，タイプａ～ｃの結果である。

表５　タイプａ～ｃの郵送Ｂと郵送Ａの回答差（中間的選択肢，無回答以外）

郵送Ｂ－郵送Ａ	選択肢数
－5.0～－0.1%	6
0.0～　4.9	11
5.0～　9.9	19
10.0～　14.9	18
15.0～　19.9	12
20.0～　24.9	4
合計	70

回答差の小さいものから大きいものまでかなり違いがある。前項でみたように，郵送Ａでは，質問によって中間的選択肢への回答差が大きいことも影響していると考えられる。

(2) 回答がひとつの選択肢に集中する場合

中間的選択肢を提示しない場合，中間的選択肢を提示した場合に比べて，ひとつの選択肢に回答差が集中している質問では，その集中している選択肢をみると，**表６**にあげた例のように，次のような特徴のある選択肢であることがわかる。

・好ましそうにみえる選択肢
・あいまいで中間的選択肢に近い意味に捉えられる選択肢
・３段階の頻度の真中の選択肢

好ましそうにみえる選択肢の例としては，第22問Ｂ「情報化について：過多」がある。郵送Ａと郵送Ｂを比較すると，「乙」ではほとんど変わらないのに対し，「甲」では郵送Ａよりも郵送Ｂのほうがかなり多い。郵送Ａでは，「甲」のほうが前向きな意味を持つ好ましい回答として選ばれたと考えられる。例にはあげていないが，第５問Ｆの「見たい番組しか見ない」も，もうひとつの選択肢である「見たいと思わない番組でも見る」よりも，郵送Ｂで回答が集中し，好ましい回答として選ばれたと思われる。

あいまいで中間的選択肢に近い意味に捉えられる選択肢としては，第５問Ｂ「テレビの見方：時刻決まっているか」の「あまり決まっていない」がある。この選択肢は，他方の「だいたい決まっている」よりもあいまいで，郵送Ｂで偏って多くなる。

表６　ひとつの選択肢に回答差が偏っている質問の例

◆好ましそうにみえる選択肢
―情報化について　B：過多―
第 22 問 B　私たちは，テレビや新聞などから，いろいろな情報を知ることができます。甲と乙のような見方がありますが，あなたのお気持ちはどちらに近いでしょうか。

	郵送 A	郵送 B
1. 甲：いろいろな情報があるので，ものごとの判断に役立つ	48.8 %	65.3 %
2. 乙：いろいろな情報があり過ぎて，迷わされることが多い	33.2	33.5
3. どちらともいえない	16.4	―
4. わからない，無回答	1.6	1.2

◆あいまいで中間的選択肢に近い意味に捉えられる選択肢
―テレビの見方　B：時刻決まっているか―
第 5 問 B．あなたがテレビを見る時刻はだいたい決まっていますか，それとも，あまり決まっていませんか。

	郵送 A	郵送 B
1. だいたい決まっている	80.8 %	81.0 %
2. あまり決まっていない	13.8	18.0
3. どちらともいえない	4.4	―
4. わからない，無回答	1.0	1.0

◆３段階の頻度の真中の選択肢
―現代的なテレビの見方　B：一瞥性―
第6問B．テレビをつけておいて，気になったときだけ目を向ける

	郵送 A	郵送 B
1. よくある	26.8 %	29.2 %
2. ときどきある	36.5	43.4
3. ほとんどない	27.1	26.1
4. どちらともいえない	8.4	―
5. わからない，無回答	1.3	1.3

３段階の頻度の質問では，第６問Ｂ「現代的なテレビの見方：一瞥性」のように，郵送Ｂで真中の「ときどきある」が多くなる。この傾向は，すべてのタイプcの質問（第６問Ａ～Ｄ）でみられた。３段階の頻度の場合，真中の選択肢が中間的な意味を持つため，郵送Ｂで多くなると考えられる。さらに，必ずしも有意な差ではなく，理由はわからないが，郵送Ｂの「ほとんどない」は郵送Ａよりも低めで，「よくある」がむしろ高めになるという傾向がみられた。

(3) 回答が複数の選択肢に分散する場合

中間的選択肢を提示しない場合，複数の選択肢に分散する場合は，郵送Ａで中間的選択肢への回答が多い。そして，片方だけに社会的望ましさのような魅力があるといった選択肢の偏りが無い。**表７**にあげたように，

・どちらの回答もありうるような質問
・ふだん考えたことが無い内容の質問

など回答を選びにくい質問が多い。

第５問Ｇ「テレビの見方：ひとりだけで見たいか」は，どちらの回答もありうる質問で，郵送Ａの中間的選択肢への回答の代わりに郵送Ｂでは，両方の回答に分散している。

また，第９問Ｃ「テレビの効用:生き方の手本」も「そう思う」と「そう思わない」の両方にほぼ同じようにわかれた。この質問は，ふだん考え

表７　複数の選択肢に分散する質問の例

◆どちらの回答もありうるような質問
―テレビの見方　G：ひとりだけで見たいか―
第5問 G．あなたは，テレビをひとりだけで見たいほうですか，それとも，他の人といっしょに見たいほうですか。

	郵送 A	郵送 B
1. ひとりだけで見たい	37.4 %	56.8 %
2. 他の人といっしょに見たい	22.7	41.4
3. どちらともいえない	38.9	―
4. わからない，無回答	1.0	1.8

◆ふだん考えたことが無い内容の質問
―テレビの効用　C：生き方の手本―
第 9 問 C．生き方や行動の手本が得られる

	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	33.3 %	52.3 %
2. そう思わない	26.1	46.9
3. どちらともいえない	38.6	―
4. わからない，無回答	2.0	0.8

ることが無いような意見を聞いており，基本的に選びにくい質問と考えられ，郵送Aで中間的選択肢への回答が多い。

6 中間的選択肢の回答者の特徴

それでは，中間的選択肢を回答するのはどのような人たちなのであろうか。林（1996）の国際比較調査でみられたように，日本人は他の国の人に比べて，中間的選択肢を多く回答する傾向がある。日本人の中で中間的選択肢を回答しやすい特定の性・年層などの人口統計学的な属性があるのだろうか。また，特定の意見傾向を持つ人が，中間的選択肢を回答しやすいということなどがあるのだろうか。

今回，郵送Aで中間的選択肢を提示した質問は38項目である。調査相手一人当たりの中間的選択肢への回答数は，1項目も中間的選択肢を選ばない人は18人で約3%，1～5個が27%，6～10個が37%，11～15個が22%，16～27個が10%で分散しており，特別に少ない人や多い人はいない。

中間的選択肢を多く選ぶ人の特徴はどのようなものなのだろうか。ここでは，中間的選択肢数が20～27個の22人について，個別にみていく[4)]。男性は14人，女性は8人，年齢は16～80歳までの範囲で各年層の人がいて，性・年層との関係は弱いようにみえる。学歴や職業についても目立った特徴はみられない。一方で，家族人数は2人以上で単身者の人はいない。また，質問への回答をみると，たとえば，テレビへの満足度は，「どちらかといえば満足」「どちらかといえば不満足」のどちらかであり，両極への回答がまったく無い。しかし，社会満足度では，「まったく不満」が2人，生活満足度では，「十分満足」が4人，「まったく不満」が1人いて，両極の人がいないわけではない。

中間的選択肢の回答数について，回答者の属性や他の質問の回答はどのように影響しているのであろうか。中間的選択肢数を従属変数（被説明変数）とする重回帰分析を行ったところ，**表8**のような結果が得られた。

表8　中間選択肢への回答数合計を従属変数とする重回帰分析の結果（郵送A）

	偏回帰係数 B			
	モデル1		モデル2	
男16～39	－.85		－.89	
男40～59	.18		－.05	
男60以上	－.04		.04	
女16～39	－.47		－.44	
女40～59	.29		.27	
単身者	－1.88	**	－1.93	**
NHKのほうをずっと多く見る	－2.22	**	－2.01	*
民放のほうをずっと多く見る	.46		.29	
現在のテレビに十分満足	－2.02	**	－1.76	*
現在のテレビにどちらかといえば満足	－.02		.09	
生活に十分満足	—		－.93	
生活にどちらかといえば満足	—		－1.56	**
（定数）	9.20	**	10.16	**
調整済み R^2	.036		.051	

** p≦.01，* p≦.05

重回帰分析は，予測モデルを作る手法である。各項目の値に偏回帰係数Bをかけたものを定数に足すことによって，中間的選択肢数の予測を行うことができる。ここでは，たとえば，性・年層では，該当する項目は，1の値を持ち該当しない場合には0の値を持つ。たとえば，単身者であれば，単身者の値の1にBの－1.88をかけたものを定数の9.20に足して，中間的選択肢数を7.32と予測することができる。また，女60歳以上の場合，性・年層項目はすべて0の値を持つ[5]。他の質問の変数（属性項目，回答項目）も同様である。すなわち，ここにある変数（回答項目）以外は0となる。値が0の場合は，Bをかけても0となるので，どの項目にも該当しない人（女60歳以上，家族人数2人以上，NHKと民放を同じくらい見る，現在のテレビに不満）は，定数の9.20が中間的選択数であると予測される。

調整済みR^2はその予測の適合度を示すが，このモデル1の0.036はあまり適合度は高くない。偏回帰係数Bは，予測に対する影響の大きさを表し，有意水準を満たしているものに，「**」（p≦0.1）または，「*」（p≦0.5）をつけている。すなわち，中間的選択肢数について，このマークのついている項目で偏回帰係数Bの数値が正のときには正の，負のときには負の有意な影響を与えていると考えられる。このように，この分析からどのような変数（属性や回答項目）が中間的選択肢の数に影響があるかをみることができる。

表8のモデル1をみると，性・年層は有意な影響はみられない。有意な影響のあるのは，「単身者」（家族人数1人）や「NHKのほうをずっと多く見る」「現在のテレビに十分満足」などに負の影響がみられる。なお，学歴や職業なども入れて重回帰分析を試みたが，影響は弱かった。すなわち，人口統計学的な属性の影響はほとんどなく，単身者，または，テレビに関連した回答項目が中間的選択肢数に影響していたと考えられる。

なお，モデル1では，「現在のテレビに十分満足」は負の影響が強いが，テレビに関連している項目であるという理由以外に，極端な回答項目であるため，という理由も考えられる。そこで，「生活に十分満足」「生活にどちらかといえば満足」を入れて重回帰分析を行ったところ，モデル2のようになった。「生活にどちらかといえば満足」のほうが負の影響が強く，極端な回答と思われる「生活に十分満足」のほうが影響が弱い。他にも同様の傾向がみられる質問があり，「どちらかといえば・・」といった中間的な意見に近いと思われる項目のほうが，極端な項目よりも，負の影響が強くなる場合があり，必ずしも中間的な項目を好む人が，中間的選択肢を選ぶという特徴は無いと思われる。

モデル1で影響がみられた回答項目の中間的選択肢についての傾向を個別の選択肢についてみると，「単身者」は実数が58しかないため信頼性は低いが，テレビの見方で「一人で見ることが多い」や「テレビ番組を自分で選ぶことが多い」をどちらも9割の人が選んでおり，「どちらともいえない」という中間的選択肢を選ぶ人はほとんどいない（1～2人）。

「NHKのほうをずっと多く見る」人はテレビの効用について，「生活に習慣」「生き方の手本」「意見の理解」「代理経験」に「そう思う」が多く，「どちらともいえない」が少ないなど，テレビのことを肯定的にとらえる回答が多く，ほとんどの質問で，それ以外の回答の人と比

べて，中間的選択肢への回答は少ないか同じ程度である。中間的選択肢への回答が他と比べて多いのは，Q22C「役に立つ情報を手に入れるためにはお金がかかっても構わない」と，Q23B「人々の意見はマスコミの言うとおりに動かされている」という2つの質問項目のみである。

「現在のテレビに十分満足」も実数が75しかないため，信頼性は低いが，「テレビに夢中になるか」や，テレビの効用の質問群でテレビのことを肯定的にとらえる回答が多いなど，ほぼすべての質問で，それ以外の回答の人と比べて中間的選択肢への回答は少ないか，同じ程度である。

中間的選択肢の回答数への影響はみられなかったが，性・年層別についても個別の質問をみてみた。質問によって中間的選択肢への回答が多い年層が異なり，一貫した傾向はなかった。

ここまで，中間的選択肢の回答数と属性や質問との関連をみてきた。その結果，性・年層などの属性で，中間的選択肢を選びやすい人がいるのではなく，その質問に関連した状況にある場合や，態度や意見を持っているかどうかで中間的選択肢が選ばれていた[6)]。今回の調査では，対象とした質問にテレビに関連のある質問が多いこと，調査相手が単身者の場合には明らかに回答が決まってくるような質問が含まれていたことなどが影響していた。調査相手は，中間的選択肢を安易に選ぶのではなく，自分の意見にもっとも近い回答として選んでいたと考えられる。

7 おわりに

郵送調査で中間的選択肢を提示した場合，テーマに関連した意識や特徴を持つ人で中間的選択肢への回答が少ない傾向がみられ，安易に中間的選択肢を回答するような人は少なく，他の選択肢と同じように回答されているものと考えてよいことがわかった。また，テーマに関連していなければ，性・年層などで中間的選択肢を回答しやすい傾向なども無い。

個人面接法のように調査員によって，調査相手の回答を中間的選択肢に振り分ける作業を行うことはできないが，郵送法調査における中間回答は安易な回答ではなく，調査相手のひとつの意見と考えられる。

ただし，今回の分析でもみられたように，中間的選択肢の回答の意味は，どちらの回答もありうる場合やふだん考えたことの無いような場合など，質問によって傾向が異なる。調査企画者は，そのことに留意すべきであろう。

（おのでら のりこ）

注：

1）調査環境の悪化によって調査有効率の減少した個人面接法に代わり，配付回収法や郵送調査法が採用されるようになってきている（NHK 調査方式比較プロジェクト，2010 など）。

2）タイプdの質問は，面接で提示しており，さらに，その回答を選ぶ調査相手が多かったことから，郵送Ｂでも提示を行った。なお，もしも，提示を行っていなければ，どのような質問の場合でも，何らかの選択肢に回答しようとする自記式特有と思われる回答傾向が確認できたかもしれない。

3）タイプcの3段階の頻度の選択肢では，郵送Aと郵送Bで「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」の3選択肢のバランスが異なる傾向がみられるものがあった。

4）実験調査のサンプル数が少ないために，クロス集計では，中間的選択肢の数別の属性項目の違いをみることは困難である。たとえば，中間的選択肢数16～27個は，10%であるが67人しかいない。そこで，上位の個別の回答を参考として，みることにした。

5）重回帰分析では，量的変数ではないカテゴリー変数（男性・女性など）を投入する場合，男性カテゴリーを1として投入すれば，女性カテゴリーは0で表すことができるので投入しない。このような変数のことをダミー変数という。年層の場合は，残りの5つのカテゴリーが0になるカテゴリーとして，女60歳以上は分析に投入していない。質問についても，たとえば「テレビの満足」の場合，「現在のテレビに十分に満足」「現在のテレビにどちらかといえば満足」を投入して，「それ以外」が投入されていないことになる。

6）特定の年層に関心の高いテーマである場合には，年層で中間的選択肢の回答数が異なると思われる。

文献：

・Dillman, D. A., Smyth, J. D. and Christian, L. M. *Internet, Mail, and Mixed-Mode Surveys: The Tailored Design Method. -3rd ed.*（Wiley, 2009）

・林知己夫『日本らしさの構造』（東洋経済新報社，1996）

・林英夫『郵送調査法〔増補版〕』（関西大学出版部，2006）

・前田忠彦「郵送調査法の特徴に関する一研究―面接調査法との比較を中心として―」『統計数理』53（1）：57-81（2005）

・マンジョーニ，T. W.（著），林英夫（監訳），村田晴路（訳）『郵送調査法の実際―調査における品質管理のノウハウ―』（同友館，1999）
原著：Mangione, T. W., *Mail Surveys: Improving the Quality*. Applied Social Research Series, 40, Thousand Oaks,（Sage,1995）

・諸藤絵美・平田明裕・荒牧央「テレビ視聴とメディア利用の現在（1）（2）―『日本人とテレビ・2010』調査から―」『放送研究と調査』60（8）：2-29，60（10）：2-27（2010）

・村田ひろ子，小野寺典子「郵送調査の回答傾向の特性」『放送研究と調査』60（12）：56-78（2010）

・調査方式比較プロジェクト「世論調査における調査方式の比較研究―個人面接法，配付回収法，郵送法の2008年比較実験調査から―」『NHK放送文化研究所年報』54：105-175（2010）

・Onodera, N., Murata, H., Aramaki, H., Kono, K., Hara, M., Nishi, K. and Nakaaki, H., The Effects of Providing Middle Options in Mail Surveys :Based on a Comparison with Face-to-Face Surveys. Paper presented at WAPOR's Annual Conference 2012.

・Sudman, S. and Bradburn, N.M. *Asking Questions: A Practical Guide to Questionnaire Design*. 140-141（Jossey-Bass Publishers, 1982）

・鈴木達三「質問の仕方の違いによる回答への影響－カールトンとシューマンのレビュー（1）」『新情報』83，（2000）
原著：Kalton, G. and Schuman, H., The Effect of the Question on Survey Responses: A Review, *Journal of the Royal Statitical Society. Series A*（*General*），Vol. 145：42-73, No. 1（1982）

・山田一成『聞き方の技術　リサーチのための調査票作成ガイド』（日本経済新聞出版社，2010）

・吉田潤「世論調査の質問文の検討（1）―質問の尋ね方や形式の問題―」『文研月報』30（9）：16-26（1980）

中間選択肢に関するタイプａ～ｄ別単純集計一覧

～「日本人とテレビ・2010」調査　個人面接法・郵送法比較～

＜表記について＞

○質問文は，郵送法で使用したものを記載した。
○提示した選択肢の結果を枠で囲って区別している。
○表中の数字は，各選択肢の回答数を，各調査の有効数で除した結果をパーセント（%）で示したもの（小数点以下第２位を四捨五入）。
○結果の「―」は，選択肢がなかったことを示している。
○郵送Ａと郵送Ｂの数字右側の「＋」「－」は，それぞれ面接と比較した検定結果（信頼度 95%）。
○表中の不等号は，郵送Ａと郵送Ｂを比較した検定結果（信頼度 95%）。

タイプａ：回答項目リストをまったく使用しない

―テレビの見方　Ａ：ひとりで見るか―

第５Ａ問　あなたの，テレビの見方について，いろいろおうかがいします。（ＡからＨまで，それぞれ○は１つ）

Ａ．あなたは，テレビをひとりで見ることが多いですか，それとも，他の人と見ることが多いですか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. ひとりで見ることが多い	42.5	43.2	＜50.3 ＋
2. 他の人と見ることが多い	44.6	38.6 －	＜48.8
3. どちらともいえない	11.4	17.4 ＋	―
4. わからない，無回答	1.5	0.8	0.8

―テレビの見方　Ｂ：時刻決まっているか―

第５Ｂ問　Ｂ．あなたがテレビを見る時刻はだいたい決まっていますか，それとも，あまり決まっていませんか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. だいたい決まっている	75.0	80.8 ＋	81.0 ＋
2. あまり決まっていない	21.4	13.8 －	＜18.0
3. どちらともいえない	2.0	4.4 ＋	―
4. わからない，無回答	1.5	1.0	1.0

―テレビの見方　Ｃ：自分で選ぶか―

第５Ｃ問　Ｃ．あなたがご覧になるテレビ番組は，あなたご自身で選ぶことが多いですか，それとも，他の人が選ぶことが多いですか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. 自分で選ぶことが多い	61.6	66.2	＜79.7 ＋
2. 他の人が選ぶことが多い	20.7	15.1 －	19.3
3. どちらともいえない	15.8	18.1	―
4. わからない，無回答	1.9	0.7 －	1.0

―テレビの見方　Ｄ：時間やりくりするか―

第５Ｄ問　Ｄ．あなたは，時間のやりくりをしてテレビを見ることが，よくありますか，それとも，ほとんどありませんか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. よくある	20.8	24.0	27.6 ＋
2. ほとんどない	66.7	53.5 －	＜71.1
3. どちらともいえない	10.4	21.7 ＋	―
4. わからない，無回答	2.0	0.8	1.3

―テレビの見方　Ｅ：夢中になるか―

第５Ｅ問　Ｅ．あなたは，思わず夢中になってテレビを見ていることがよくありますか，それとも，ほとんどありませんか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. よくある	43.5	39.7	＜55.4 ＋
2. ほとんどない	39.4	28.1 －	＜43.1
3. どちらともいえない	15.4	31.4 ＋	―
4. わからない，無回答	1.7	0.8	1.5

―テレビの見方　Ｆ：見たいものしか見ないか―

第５Ｆ問　Ｆ．あなたは，見たい番組しかテレビを見ないほうですか，それとも，とくに見たいと思わない番組でも見るほうですか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. 見たい番組しか見ない	60.0	57.1	＜70.3 ＋
2. 見たいと思わない番組でも見る	27.7	25.6	28.7
3. どちらともいえない	10.4	16.6 ＋	―
4. わからない，無回答	1.8	0.7	1.0

―テレビの見方　Ｇ：ひとりだけで見たいか―

第５Ｇ問　Ｇ．あなたは，テレビをひとりだけで見たいほうですか，それとも，他の人といっしょに見たいほうですか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. ひとりだけで見たい	36.3	37.4	＜56.8 ＋
2. 他の人といっしょに見たい	30.1	22.7 －	＜41.4 ＋
3. どちらともいえない	31.2	38.9 ＋	―
4. わからない，無回答	2.4	1.0 －	1.8

―テレビの見方　Ｈ：見ないと落ち着かないか―

第５Ｈ問　Ｈ．あなたは，テレビがついていないと落ち着かないほうですか，それとも，そういうことはありませんか。

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. 落ち着かない	16.6	19.2	＜24.1 ＋
2. そういうことはない	76.1	68.1 －	＜74.9
3. どちらともいえない	5.6	11.2 ＋	―
4. わからない，無回答	1.6	1.5	1.0

―チャンネル切り換えの有無―

第７問　あなたは，テレビの番組を見ている途中で，リモコン装置を使って，チャンネルを頻繁に切り換えることがよくあるほうですか，それとも，ほとんどないほうですか。（○は１つ）

	面接	郵送Ａ	郵送Ｂ
1. よくあるほう	34.9	37.8	＜43.7 ＋
2. ほとんどないほう	52.6	40.1 －	＜52.8
3. どちらともいえない	10.4	19.4 ＋	―
4. リモコン装置は持っていない	0.3	1.1 ＋＜	3.0 ＋
5. わからない，無回答	1.8	1.6	0.5 －

―家族コミュニケーション―

第16問　あなたは日ごろ，家族の方とよく話をしていると思いますか。それとも，そう思いませんか。（○は１つ）

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	65.8	57.6 －＜68.0	
2. そう思わない	16.0	16.1 ＜ 25.7 ＋	
3. どちらともいえない	12.8	21.2 ＋	―
4. 家族はいない	3.7	4.8	6.1 ＋
5. わからない，無回答	1.7	0.3 －	0.2 －

―選択強度　A：選択性―

第26 A問　次に，あなたの性格についてお尋ねします。A，B それぞれについてお答えください。

A．あなたは，欲しいものは，納得がいくまで探すほうですか。（○は１つ）

	面接	郵送 A	郵送 B
1. はい	43.4	44.7 ＜ 52.6 ＋	
2. いいえ	38.9	26.3 －＜46.7 ＋	
3. どちらともいえない	15.1	28.6 ＋	―
4. わからない，無回答	2.6	0.5 －	0.7 －

―選択強度　B：即時充足―

第26 B問　B．あなたは，欲しいものはすぐ手に入らないと，気がすまないほうですか。（○は１つ）

	面接	郵送 A	郵送 B
1. はい	14.6	18.9 ＋	23.3 ＋
2. いいえ	70.1	57.6 －＜76.1 ＋	
3. どちらともいえない	12.5	22.5 ＋	―
4. わからない，無回答	2.8	1.0 －	0.7 －

タイプb：回答項目リストには質問のみ提示，選択肢の提示なし

―テレビの効用　A：生活情報―

第９A問　テレビとあなたの生活との関係についてうかがいます。次のAからHについてお答えください。（AからHまで，それぞれ○は１つ）

テレビがあることで

A．毎日の生活に欠かせない情報が得られる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	73.1	68.6 ＜ 76.1	
2. そう思わない	15.0	10.2 －＜23.4 ＋	
3. どちらともいえない	9.5	19.5 ＋	―
4. わからない，無回答	2.4	1.6	0.5 －

―テレビの効用　B：習慣やリズム―

第９B問　B．毎日の生活に習慣やリズムが生まれる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	44.1	48.8 ＜ 59.1 ＋	
2. そう思わない	40.8	25.1 －＜40.1	
3. どちらともいえない	12.7	23.8 ＋	―
4. わからない，無回答	2.4	2.3 ＞ 0.8 －	

―テレビの効用　C：生き方の手本―

第９C問　C．生き方や行動の手本が得られる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	43.4	33.3 －＜52.3 ＋	
2. そう思わない	33.7	26.1 －＜46.9 ＋	
3. どちらともいえない	19.9	38.6 ＋	―
4. わからない，無回答	3.0	2.0	0.8 －

―テレビの効用　D：一家団らん―

第９D問　D．家族の団らんに役に立つ

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	64.7	60.6 ＜ 73.6 ＋	
2. そう思わない	20.1	11.8 －＜25.6 ＋	
3. どちらともいえない	12.2	25.5 ＋	―
4. わからない，無回答	3.0	2.1	0.8 －

―テレビの効用　E：話のタネ―

第９E問　E．人とつきあうときの話のタネが得られる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	75.1	71.1 ＜ 83.7 ＋	
2. そう思わない	14.4	8.0 －＜15.7	
3. どちらともいえない	8.0	19.0 ＋	―
4. わからない，無回答	2.4	1.8	0.7 －

―テレビの効用　F：意見の理解―

第９F問　F．さまざまな意見や考え方が理解できる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	74.6	65.2 －＜85.6 ＋	
2. そう思わない	10.5	8.0 ＜ 13.7	
3. どちらともいえない	12.0	24.8 ＋	―
4. わからない，無回答	3.0	2.0 ＞ 0.7 －	

―テレビの効用　G：代理経験―

第９G問　G．現実にはできない経験が味わえる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	55.4	51.2 ＜ 63.2 ＋	
2. そう思わない	26.9	19.0 －＜36.0 ＋	
3. どちらともいえない	13.6	27.6 ＋	―
4. わからない，無回答	4.1	2.1 －	0.8 －

―テレビの効用　H：話し相手―

第９H問　H．話し相手の代わりになる

	面接	郵送 A	郵送 B
1. そう思う	17.4	18.1 ＜ 25.7 ＋	
2. そう思わない	70.7	62.1 －＜73.3	
3. どちらともいえない	9.1	18.1 ＋	―
4. わからない，無回答	2.9	1.8	1.0 －

―情報化について　A：有効性―

第22 A問　私たちは，テレビや新聞などから，いろいろな情報を知ることができます。次のAからCについて甲と乙のような見方がありますが，あなたのお気持ちはどちらに近いでしょうか。（AからCまで，それぞれ○は1つ）

A．

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：知っておいてよかったと思う情報が多い	70.8	66.5 ＜ 77.4 +	
2. 乙：知っても，どうということのない情報が多い	18.5	13.0 −＜20.8	
3. どちらともいえない	6.7	19.2 +	—
4. わからない，無回答	4.0	1.3 −	1.8 −

―情報化について　B：過多―

第22 B問　B．

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：いろいろな情報があるので，ものごとの判断に役立つ	52.8	48.8 ＜ 65.3 +	
2. 乙：いろいろな情報があり過ぎて，迷わされることが多い	35.9	33.2 33.5	
3. どちらともいえない	6.8	16.4 +	—
4. わからない，無回答	4.6	1.6 −	1.2 −

―情報化について　C：対価―

第22 C問　C

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：役に立つ情報を手に入れるためには，かなりお金がかかっても構わない	16.5	8.7 −＜13.5	
2. 乙：役に立つとはいっても，情報のためにそれほどお金をかけたいとは思わない	71.8	68.6 ＜ 85.0 +	
3. どちらともいえない	6.9	20.4 +	—
4. わからない，無回答	4.8	2.3 −	1.5 −

―マスコミについて　A：事実どおりか―

第23 A問　次のAからCのような見方には，どうお考えですか。（AからCまで，それぞれ○は1つ）

A．マスコミが伝えていることは，ほぼ事実どおりだと思う

	面接	郵送A	郵送B
1. そう思う	25.5	20.4 −＜35.6 +	
2. そう思わない	52.3	41.2 −＜63.4 +	
3. どちらともいえない	17.6	37.8 +	—
4. わからない，無回答	4.6	0.7 −	1.0 −

―マスコミについて　B：マスコミ誘導―

第23 B問　B．人びとの意見は，知らないうちにマスコミの言うとおりに動かされていることが多い

	面接	郵送A	郵送B
1. そう思う	75.3	74.5 ＜ 83.7 +	
2. そう思わない	10.9	7.4 −＜15.5 +	
3. どちらともいえない	9.1	17.1 +	—
4. わからない，無回答	4.7	1.0 −	0.8 −

―テレビ特性　C：実感―

第23 C問　C．テレビで見たことは，直接見聞きしたのと同じように，実感が持てる

	面接	郵送A	郵送B
1. そう思う	36.9	30.0 −＜45.9 +	
2. そう思わない	39.8	37.4 ＜ 53.1 +	
3. どちらともいえない	18.7	31.0 +	—
4. わからない，無回答	4.6	1.5 −	1.0 −

―関心の方向　A：仕事か余暇―

第25 A問　話は変わりますが，次のAからCについて，甲と乙とを比べた場合，どちらに多く関心を持っていますか。（AからCまで，それぞれ○は1つ）

A．

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：仕事（家事）や勉強のこと	47.7	35.8 −＜46.9	
2. 乙：趣味やレジャーのこと	39.4	38.6 ＜ 51.7 +	
3. どちらともいえない	9.4	24.0 +	—
4. わからない，無回答	3.5	1.6 −	1.5 −

―関心の方向　B：自分か社会―

第25 B問　B．

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：自分の生活のこと	71.5	62.9 −＜ 72.6	
2. 乙：社会のこと	18.0	18.4 ＜ 25.9 +	
3. どちらともいえない	7.0	17.1 +	—
4. わからない，無回答	3.5	1.6 −	1.5 −

―関心の方向　C：将来か現在―

第25 C問　C．

	面接	郵送A	郵送B
1. 甲：将来のこと	33.7	38.3 43.2 +	
2. 乙：現在のこと	55.4	40.6 −＜55.3	
3. どちらともいえない	7.2	18.4 +	—
4. わからない，無回答	3.7	2.8	1.5 −

タイプc：回答項目リストに選択肢を提示，ただし中間的選択肢の提示はなし

―現代的なテレビの見方　A：環境性―

第6 A問　では，あなたはふだん，AからDにあるようなテレビの見方をすることがありますか。次のように分けるとどれになりますか。（AからDまで，それぞれ○は1つ）

A．家に帰ると，とりあえずテレビをつける

	面接	郵送A	郵送B
1. よくある	40.8	39.4	41.6
2. ときどきある	22.8	26.9	＜32.2 +
3. ほとんどない	33.1	26.3 −	25.1 −

4. どちらともいえない	1.7	6.1 +	—
5. わからない，無回答	1.5	1.3	1.2

―現代的なテレビの見方　B：一瞥性―

第６B問　B．テレビをつけておいて，気になったときだけ目を向ける

	面接	郵送 A	郵送 B
1. よくある	30.3	26.8	29.2
2. ときどきある	32.6	36.5	＜ 43.4 +
3. ほとんどない	32.5	27.1 −	26.1 −
4. どちらともいえない	2.1	8.4 +	—
5. わからない，無回答	2.5	1.3	1.3

―現代的なテレビの見方　C：引照性―

第６C問　C．他の番組のことや，出演者の情報を重ね合わせながら見る

	面接	郵送 A	郵送 B
1. よくある	15.6	14.4	＜ 19.5 +
2. ときどきある	21.1	30.5 +	＜ 38.1 +
3. ほとんどない	57.8	44.8 −	41.1 −
4. どちらともいえない	2.5	9.2 +	—
5. わからない，無回答	3.0	1.0 −	1.3 −

―現代的なテレビの見方　D：一体性―

第６D問　D．テレビにツッコミを入れながら見る

	面接	郵送 A	郵送 B
1. よくある	10.3	12.0	11.4
2. ときどきある	24.5	35.6 +	＜ 45.4 +
3. ほとんどない	62.0	45.8 −	42.1 −
4. どちらともいえない	1.2	4.3 +	—
5. わからない，無回答	2.0	2.3	1.2

タイプd：回答項目リストに中間的選択肢を含めて選択肢を提示

―テレビの影響イメージ　A：深く考える力―

第11 A問　テレビの影響についてうかがいます。次のAからEについて，あなたのお考えに近いものを選んでください。（AからEまで，それぞれ○は１つ）

A．テレビは人々がものごとを深く考える力を・・・

	面接	郵送 A	郵送 B
1. 強くした	34.2	29.9	27.6 −
2. 弱くした	14.1	22.8 +	20.3 +
3. どちらともいえない	47.5	45.5	＜ 51.7
4. わからない，無回答	4.2	1.8 −＞	0.5 −

―テレビの影響イメージ　B：画一化―

第11 B問　B．テレビは人々の生活のしかたを・・・

	面接	郵送 A	郵送 B
1. 個性的なものにした	11.6	9.5	10.4
2. 似たものにした	37.3	48.3 +	48.3 +
3. どちらともいえない	45.2	39.7 −	40.8
4. わからない，無回答	5.9	2.5 −＞	0.5 −

―テレビの影響イメージ　C：暴力行為―

第11 C問　C．テレビは青少年の非行や暴力行為を・・・

	面接	郵送 A	郵送 B
1. 抑制した	8.1	9.2 ＞	3.6 −
2. 助長した	35.0	35.3	37.5
3. どちらともいえない	51.9	53.5	58.6 +
4. わからない，無回答	5.0	2.0−＞	0.3 −

―テレビの影響イメージ　D：物か心か―

第11 D問　D．テレビは人々に

	面接	郵送 A	郵送 B
1. 心の豊かさを重視させた	25.1	16.3 −	18.0 −
2. 物の豊かさを重視させた	26.1	33.7 +	30.9 +
3. どちらともいえない	43.8	48.3	50.5 +
4. わからない，無回答	5.0	1.8 −	0.7 −

―テレビの影響イメージ　E：政治や社会関心―

第11 E問　E．テレビは人びとの政治や社会に対する関心を・

	面接	郵送 A	郵送 B
1. 強くした	72.3	68.6	66.2 −
2. 弱くした	2.6	5.7 +	4.1
3. どちらともいえない	21.4	24.1	29.0 +
4. わからない，無回答	3.7	1.5 −	0.7 −